

# 民舞指導者講習会

2003. 3. 21

## 1. 冬大会パネリスト提案

### 別紙参照

## 2. 冬大会から学んだこと

- ① 民舞の文化研究や教材研究とは、その踊りが踊られてきた歴史的背景や生活や労働とのかかわりを、資料的に調べるだけでなく、踊りの動きの中に求める必要がある。(民舞研の活動)
- ② 民舞の動きは他の教材(マットや鉄棒など)と同じような分析・総合という科学的方法はなじまない。故に民舞のグループ学習は他の教材とは違った独自の方法で取り組む必要がある。  
例えば、民舞はカウントで踊ることができない。口唱歌によって初めて民舞の動きをイメージ化でき伝統的な身体技法を学ぶことができる。(同志会 進藤)
- ③ 民舞研・同志会とも学校教育で教える具体的なイメージがない。とくに「継承・発展」の「発展」のイメージがまったくなし。また、保存会の指導法と学校教育の指導法との違いについて論及なし。むしろ保存会の指導法をそのまま持ち込むことが意味あることと考えている。
- ④ ③に関連するが上の両者とも民舞の一般化・普遍化についても論及がなかった。民舞は「生活や労働から生まれ自然体」であると押さえるが、今生きる子ども達には、そういった生活背景がなく民舞を踊る「自然体」の身体になっていない。民舞を踊るときにも他の踊りのように身体を加工しなくてはならない。
- ⑤ 身体への接近は科学的合理的な部分と、そうでない(まだ科学では解明できていない)部分(内観)があるのではないか。(久保)

## 3. 若干の整理

### ○東京民舞研

正式名称 東京民族舞踊研究会

「それまでわらび座や民舞の講習会などで教材化されていた踊りをそのまま取り入れていましたが、もっと民族舞踊のもつ文化性を大切にしようという動きの中で新しい教材が広がっていったのです。」

「民舞研が一番大事にしているのは、土地の人々の芸能に対する想い、こだわり。」「民舞は自然体としての動き、日常の行動から生まれたものである。」

### ○同志会全国舞踊分科会

「民舞」を民俗舞踊ととらえる。

**民俗** 地方・時代によってそれぞれ独特の特徴を持っている、民間の生活様式や風俗。

**民族** [人種と違って] 言語・宗教・生活慣習など、文化的な観点から見て、共通意識をいだいている一まとまりの人びと。[他民族に対する時は、個々の利害を超えた緊密な連帯感を持つことが多い]

民俗舞踊の身体技法とは何かを探すことを課題としてきた。

民族舞踊で教える内容は「伝統的な身体技法」ではないか。

#### 4. 南中ソーランの指導

##### 押さえるべきポイント

- ① 民族舞踊や民族舞踊でないことは確か。ただ、日本の踊りには間違いない。新民舞あるいは創作民舞と言ってもいいのではないか。「民舞」という名称は、それ自体が広い意味をもっていると位置づけてもいいのではないか。今沖縄で踊られているエイサーの多くはアレンジしたものである。それが一般化、普遍化している。
- ② 踊りの生まれてきた背景を教える。稚内南中学校の学校再生の中から生まれてきた文化活動・文化運動であった。
- ③ 表現の技術を教える。(もちろん教師が教え込むのでなく、子ども達がグループ学習をしながら、技術を獲得していくように授業を仕組む)

南中ソーランもその原型であるわらび座のソーラン節も、労働という具体的な動きがほとんどなので、踊りを覚えて表現するポイントがはっきりしている。そのためグループ学習が組織しやすい。

- ・ 力強い表現をするにはどうするか。
- ・ 長い「ろ」を持っているという表現は、どんな技術が必要なのか。
- ・ 太い綱をもっていることを表現するには。

など、表現の技術を指導者がまずはしっかり持つ必要がある。